

幕末期宇和島藩の動向(7)

——伊達宗城を中心に——

三 好 昌 文

前号(第11巻 第5号)

2 嘉永6年ペリー来航～万延元年3月桜田門外の変

B) ハリスの来航と日米修好通商条約の締結

イ) 田原直助の再来藩

ウ) 日米修好通商条約調印と伊達宗城

エ) 一橋派としての伊達宗城

オ) 宗城の思想の変化

カ) 將軍継嗣問題と条約調印

本号

キ) 安政の大獄と桜田門外の変

ク) 宗城の側近たち

吉見長左衛門・松根図書・須藤段右衛門・林玖十郎

ケ) 宇和島藩の尊攘論者

キ) 安政の大獄と桜田門外の変

安政5年(1858)7月5日、幕府は徳川斉昭を謹慎、徳川慶恕・松平慶永を隠居・謹慎、徳川慶喜に登城停止をそれぞれ命じた。9月には安政の大獄が開始された。

同日、慶永から宗城・豊信宛の「親交御挨拶ノ絶筆」の書翰が届いた¹⁾。そのなかで、慶永は「(○前略)以後御文通も出来兼可申、御暇迄旁呈一楮候、是迄段々御懇意被成下候義難有、知己之諸侯^{肥前}へハ從両公宜御申可被下候、只々今後何分有志之諸侯為天下御尽力奉依頼」と、処分を覚悟して絶句している。慶永は宗城・豊信・斉彬らに後事を托した。肥は慶永の夫人勇子の父細川斉護、阿は

蜂須賀齊裕であろう。一橋派の幕政改革の構想は破綻し、井伊大老の幕府専制の路線が確立したかのように見えた。しかし、幕府は新しい国際情勢への対応能力を欠き、挙国一致体制をつくることもできなかった。

宗城の「越前侯へ御返事」には²⁾、「昨夜半^{貴書来、即時差出候}家僕山口丹波守（○直信，宗城の実兄，大目付）方へ遣置候^(アニハカランヤ)処，豈料，同人儀貴家へ被差添拜趨仕候，兄弟之情を以考，不及論事外視して断腸之至」と，事情を告げている。家僕とは吉見長左衛門であろうし，慶永邸に隠居^{きつと}急度慎の処分を告げに行ったのは，外ならぬ宗城の兄直信であった。直信は帰宅して「家僕へ乍泣血痛嘆之密話」をしたという。直信はさらに直弼に呼ばれ，これを宗城は「退隠を促候義哉と心裡楽待居申候」と，慶永に伝えている。慶永は江戸霊岸島の越前家別邸に閉門幽居し，雅号の春嶽を通称とした。5日付「土佐侯ヨリ越前侯へ御返書」でも，「僕も亦不日如何可相成ヤ，（○中略）天下如何相成べき哉」と痛嘆し，「只今飲居候」と述べるばかりであった。

7月6日付豊信書翰では³⁾「閣老之大姦木同ニ勝り，万事不堪杞憂也」と，周旋の方策がないと宗城に苦衷を告げている。翌7日，豊信は大目付を通じ三度まで面会を申し込んだが，閣老らは拒否した。9日，さらに宗城に，「諸大名江事情不可言云々ハ新聞，徳川家之自滅在近矣（○下略）」と，井伊直弼の情報非公開の方針を批判している。

7月19日付宗紀宛井伊直弼書翰では⁴⁾，宗紀がたびたび井伊邸を訪問していることが分かる。「隠印（○齊昭）御慎方之義者，先方ノ申口一応二応ニ而者，何分安心仕兼候，（○中略）京都へ御家臣ヲ被遣，旁へ御書通等被成候様ニ而者御不慎之次第，其辺之处御念入候様希上候」と，齊昭が謹慎中に京都の公家方に連絡を取ることを恐れ，その封圧を宗紀に依頼している。「貴君遠江守殿天下之御為を御存込被成候而，御深切より御取扱被成候上，追而小子方へも御申聞可被下趣を以，御取計被成候様希上候」と，宗紀・宗城父子に一橋派の動向に関する情報の提供を求めている。宇和島藩の帰趨は直弼に掌握されていることになる。「勿論御時節柄，此上手荒之御所置ヲ好ミ候義ハ毛頭無之，平穩ニ治り

候義専一二候得共、彼方ニ御心得違御不慎等御坐候様ニ而者、何分是非なく此上之御沙汰ニも可相成次第」と、斉昭の身边に合わせて、その旗振り役を果たしてきた宗城に対する処分も考慮されている。「段々内探り致居候得共、其御方ニ而も内実之处、御探方不一通御懸念希上候」というのは、幕閣が宗城とその側近の動向について探索を進め、宗紀自身にも実情調査を進めることを勧告していると考えられる。逆にいうと、宗城への嫌疑を晴らすのは宗紀の役割ということになる⁵⁾。

7月25日付豊信書翰では⁶⁾「将又薩兄ハ是非早々出府之様ニ仕度、越前之為にも可然哉」と宗城に言っている⁷⁾。豊信は7月20日付書翰で斉彬の大病を宗城に知らせている⁸⁾。豊信は慶永処分後の時局を、斉彬を中心に乗り切ろうと考えたのであろう。

7月25日、水戸藩士安嶋帯刀より吉見長左衛門に来書があった⁹⁾。安嶋と吉見との間には密接な接触があった。江戸駒込邸に幽居する斉昭、それに伴い国許から家老大場弥右衛門、他奥右筆頭取・用人各二人、目付一人が出府することになった。しかし、「右之人数且いづれも暴発等いたし候次第に無之」とし、動揺等の妄言があれば弁解して欲しいと言っている。安嶋自身はこの月家老になり、一橋派としての活動の中根雪江、一橋家家臣平岡円四郎らと画策していた(翌6年8月27日切腹)。安嶋は斉昭の側近として最後まで画策し、家老就任のため、宇和島藩との連絡を萩信之介に依頼したことを宗城に伝えるよう求めている。「実は臣子之至情憤懣ニ堪兼候情状故、此上一ふし出来候ハ、必激震ニ至可申、是も不得止義ニ御坐候」という安嶋の洞察は、翌8月の徳川慶篤への戊午の密勅の降下となって水戸藩を二分し、9月には安政の大獄という激震になる¹⁰⁾。

8月7日、島津斉彬卒去の報が宗城の許に届き、豊信、久留米藩主有馬頼咸^{よりしげ}からも悲報が相いついだ¹¹⁾。かれ等が柱石とも頼む斉彬の死は、斉昭の幽居以上の激震であった。

9月13日付宗城宛黒田長溥書翰では¹²⁾長溥は薩摩藩が長崎奉行へ7月20

日に死去と届け出ていると伝え、世子問題を心配して家臣を鹿児島に派遣した。発病以来の経過も知り、斉彬は病中も京都・江戸の事情を「極々心配いたし」ていたという。斉彬は7月8日、鹿児島城南砂揚場（天保山）で大規模な諸隊の操練を指揮し、翌日発熱、蘭医坪井芳洲によりコレラ（赤痢説もあり）と診断された。15日、側役山田壮右衛門を呼び、弟久光以下の重役が登城した。斉彬は久光にその子又次郎（忠徳＝忠義）を継嗣として定め、斉彬の娘暁姫^{てる}を配して襲封させ、「昨年出生之男子」（斉彬の子哲丸）をその順養子とすることを依頼した。翌16日に死去した¹²⁾

8月8日、惣出仕の上、井伊大老から將軍家定の死去が公表された。10日、宗城は「密奏」として¹³⁾ 將軍代替わり行事を簡素にし、諸国への巡見使の派遣の中止を幕閣に進言している。8月14日、7月4日付の宗城宛斉彬返翰が届いた¹⁴⁾ これを読んだ宗城は悲嘆に暮れた。南紀派の勝利について「此節承知仕候、此上者致かたも無之」と善後策を依頼し、「御互ニ閣老者悪敷存候者必定と奉存候」と井伊大老の追及が及ぶことに触れ、「閉口之外者無之」と幕政批判の中止を示唆している。宗城の建白は「至極御尤之御儀」とされ、「老竜公（○斉昭）之策極劣之よし、（○中略）何事も存し不申候」と言う。京都の状況も近衛家からの文通がないため「何事も相分り不申候」、近衛・三条両公への書翰各一通を送ったことは認めている。斉昭の「百間之大艦之御存立、誠ニ無用之言」と批判され、「左様之思召ゆへ閣老も嫌い、橋公之御不為ニも相成御義、致かた無之候」と、斉昭の言動が幕政改革の妨げとなっていることを指摘している。また、宗城が直弼に斉彬の心情を説いたことについて、「井伊江小子心中御説話、千万忝奉存候」と述べている。

8月8日、孝明天皇は条約締結に不満の勅諭を小石川邸の水戸藩主徳川慶篤に伝え、同時に斉昭・尾張藩主徳川慶恕の処罰を詰問した（幕府には10日に伝達）。いわゆる戊午の密勅である¹⁵⁾ 勅諭は公武合体を主張し、大老・閣老・三家・三卿・列藩外様譜代とも、一同の群議を求め、徳川家を扶助し、内政を整備して外国の侮辱を受けぬよう商議せよと述べている。この勅諭が水戸藩京都留守

居役鵜飼吉左衛門に授けられ、その子幸吉によって慶篤に届けられたことはよく知られている。この勅諭が幕府への打撃となることを恐れた井伊大老は、9月から安政の大獄を開始した。水戸藩論は二分して抗争し、斉昭は万延元年(1860)8月15日、水戸で没した。

このころ、宇和島藩は松田源五左衛門、檜垣弥三郎・徳久忠介の要望により、威遠流歩兵調練場を藩主庭園内から梁川荘左衛門元屋敷に移した。足輕にも稽古させるようになり、多人数のため手狭になったためである。¹⁶⁾26日、幕府にミニュゲール銃10挺の購入を出願したが不許可となった。¹⁷⁾

9月14日付宗城宛直弼書翰には、¹⁸⁾将軍代替り行事に関する宗城の建白に感謝の意を表し、閣老の評議でも話していたとしている。この時点、直弼は宗城に関する処置について一言も触れていないが、直弼と宗紀の間では最終的な交渉があった。17日、宗紀は井伊大老邸に行っているが、「藍山公記」には、「按ニ此御出ハ、公ノ御退隠ヲ勧誘ノ初ナリ、御退隠ノ条ニ委クス」と注記されている。¹⁹⁾しかし、「藍山公記」巻114(同年10～12月)は欠本となっていて、宗城の退隠に関する詳細な経過は明らかではない。宗城は11月23日に正式に致仕(依願隠居)し、世子宗徳(養父宗紀三男)が襲封して遠江守を称し、宗城は25日に伊予守と改めた(宗紀=春山は伊予入道と称する)。²⁰⁾宗城の処置は慶永らと違って幕府の処分ではなかった点に注目したい。

同年10月3日付宗城宛三条実萬返翰によると、²¹⁾実萬は8月8日の孝明天皇の勅諭問題に触れ、「勅諭之儀ハ別之子細無之」と、却って大獄の進行に「段々不容易形勢被悩、叡慮(○下略)」とし、要は「何分公武無御隔意様ニと存候」というにあり、宗紀の希望事項は近衛家にも付託すると述べている。

10月6日、山内容堂は宗城から隠退の意思を告げられ、8日宗城に返信した。²²⁾「小生も一昨夜已来反覆勘考仕候処、勿論足下同様以退策上々策と仕候決心故」と決意し、「薩兄ハ黄泉江赴キ、越兄ハ已ニ閑居、足下亦御退策御決心、如此世界、小生何ノ面目御坐候」と心境を述べている。翌6年2月26日容堂は隠退し、養嗣子鹿次郎(豊範)が相続し、9月4日鍛冶屋橋藩邸から品川の鮫

洲の別邸に移住した。10月11日、容堂は幕府から謹慎処分を通達されている。宗城・容堂の隠退は、外様大名に対する一橋派の影響が遮断されたことを意味する。

安政5年11月27日付宗紀宛直弼書翰によると、²³⁾「吉水（○吉見か）一条、御心配之趣、御尤存候」と、宗紀が側近吉見長左衛門に対する訊問について心配している。直弼は吉見が「日下部伊三次ハ懇意候趣ニ而、何か書物に有之、夫故ニ呼出、尋ニも相成候由ニ候、御家之瑕瑾ニ相成様之義者無之」と答えている。早く内談があればよかったが、「跡ニて承知仕、致方も無之事ニ候」と述べ、その処分については考慮の余地ありとする口吻がうかがえる。このころ、宗城と宗紀の通信も盛んであった。

安政6年（1859）正月26日、幕府から帰国の許可があった。（おそらく伊東玄朴の診断書により病氣と認定された）²⁴⁾ 2月13日、宗城の兄山口丹波守は大目付から勘定奉行に栄進した²⁵⁾ 宗城は3月23日江戸を出発、4月18日、宇和島の樺崎に着船した²⁶⁾ 住居は浜屋敷内の別御殿であった（7月4日）。以後、川狩・狩猟・舟遊・遠乗りという自適の生活となる。

戊午の密勅事件、安政の大獄以来、内紛の激化していた水戸藩では、尊攘派が大老井伊直弼の暗殺を計画し、宇和島藩にも勧誘の手が伸びた²⁷⁾ 安政5年12月8日、折柄の大雪のなか、水戸藩士住谷寅之助・大胡聿蔵が来宇し、宇和島藩の有志に決起を説いた。吉見長左衛門は幕府に逮捕、宗城の隠居と帰国の予定という状況にあり藩内は混乱していた。水戸藩の武田耕雲斎・豊田天功・菊池為三郎らからの情報によって、住谷らは宇和島藩の尊攘思想家として、家老松根図書・江戸詰参政吉見長左衛門・高間権八・金子孝太郎・代官儒者斎藤丈蔵・その弟で兵学者大野昌三郎・越智勝太郎を考えていた。とくに斎藤・大野兄弟と越智は、菊池為三郎との信交から、「菊池為三郎知人ニヨリ、菊池申込ヘシ、内斎藤一番」と評価されていた。しかし、斎藤は多田組代官所在勤、越智は山田組代官で不在であり、高間・金子・川上左治馬に会った。

宇和島藩の尊攘思想家は、この段階では、宗城の影響による後期水戸学を受

容したもので、水戸藩・萩藩・鹿児島藩の尊攘運動のように、藩政を変革し“突出”を志向するという実践性は持たず、尊攘派の同盟もなかった。住谷は「何モ人物ナレトモ、菊池ノ時と違ヒ、少々嫌疑アリ、規模小ナリ、不可談トソ」と評価している。徳川斉昭の信任も厚かった松根は、「(○前略)先比退隠被願上、首尾能隠居、家督之願も相済候ニ付てハ、国家之政事ニても一切大膳大夫殿(○宗徳)江被相譲候ニ付、まして天下之事共兎や角可被申上所存ハ有之間敷御推察致候間、其臣下たる者共、主人之志を奉し罷在事故、何事も御返答出来不申旨(○下略)」と返答している。住谷らは失望して12日に宇和島を去った。藩内における宗城の主導力は強く、尊攘思想は陰を潜め、藩論は公武合体論に向かうことになる。以後、宇和島藩・宗城は、尊攘派から“因循”の烙印を押されることになる。

万延元年(1860)3月23日、江戸7日出の郵書によって、宗城は3月3日、桜田門外における井伊大老暗殺の事実を知った²⁸⁾。この日宗城は恵比須山の鹿狩中に郵書を披見し、供の桑折左衛門に「大獵」と言い、「欣然タル御模様ナリキ」とある。一橋派の敗退以後の宗城の心境が表現されていよう²⁹⁾。江戸では、宗紀が老中松平和泉守乗全に呼ばれ、「此度ノ変事ニ、彦根ヨリ多人数出府騒動ニモ及バ、井伊侯ノ為ニ宜シカラザレバ(○下略)」として、井伊家への説得を依頼され、14日に藩士中井筑後を派遣している。

同年9月22日、宗城は「隠居後疝積腰痛等養生、在所潮湯入湯」のため、さらに滞国20カ月の延期の許可を幕府から受けている³⁰⁾。宗城はいぜん遊獵・大砲試撃などで日を送っている。10月9日、徳川斉昭が8月26日に死去の報が届いた³¹⁾。17日には、容堂が9月5日に謹慎を免され、帰国・親族面会・文書往復は不許可との報に接した。

ク) 宗城の側近たち

吉見長左衛門

文化14年(1817)11月17日、参政中井筑後(禄高500石、内254石4斗増高)の弟として生まれた。13歳の時(天保元

年), 吉見氏の養子となった³²⁾ 通称は元吉・逞馬・左膳・長左衛門, 諱は氏就・永憲・永弼・永錫と変わっている。家禄は『嘉永四年辛亥晩夏政分限帳』によると, 「一, 高三百七石 伊能英治郎」とある。「文政元年改分限帳」には「一, 三百七石吉見左膳」とある。この左膳が長左衛門の義父であろう。『北宇和郡誌』には, 長左衛門の曾祖父の世禄 307 石, 家老に昇進して 700 石, 父は宗紀の扈從, 天保 7 年宗城付として江戸に出, 8 年 5 月宗城付として帰国し, 世子宗徳付となり, 同 11 年 3 月隠退して, 逞馬が家督を継いだ。以来, 左膳・長左衛門と名乗ることになる。

吉見家の初代長左衛門氏信(初め中川吉左衛門, 隱居名隆貞)は, 「生国山城, 古主者村上周防守, 寛永三年之秋行幸之砌於京都, 近衛應仙様より貞山様江御頼被成候処, 其段秀宗様へ御意被成候得者, 早速被召出, (○中略)」, 寛永 20 年には当初の家禄 200 石から 300 石に昇進している。つまり, 初代長左衛門は近衛應仙(應山, 信尋)の熟知する人物で, 信尋は元和 6 年(1620)正月左大臣, 同 9 年閏 8 月関白となり, 寛永 6 年(1629)7 月に関白・左大臣を辞している。したがって寛永 3 年は信尋の権勢が最盛を極めた時期であり, 後水尾上皇とともにいわゆる寛永文化の中心に位置する人物であった。これらを背景に信尋は貞山(伊達政宗)に仕官を依頼し, 政宗は長子秀宗の文化・教養のため, 長左衛門を破格の待遇で宇和島藩に仕官させた。近衛家と吉見家との関係は以後も継承され, 宗紀・宗城は長左衛門永憲を重用したと考えられる。

宗紀(春山)の治世の末期, 長左衛門(当時左膳)は, 天保 11 年 12 月, 仙洞崩御に際し京都に使者として香奠を献上する役を務めている。翌 12 年 5 月, 宗紀の近習役, ついで扈從頭助, 同 14 年目付兼軍使を歴任した。弘化元年(1844)宗城の襲封後, 弘化 4 年 6 月小姓頭役・御徒厩野奉行兼帯・持鎗奉行を命ぜられ, 嘉永 2 年 5 月, 持鎗奉行から持筒頭に転じ, 同 6 年 6 月 27 日用人格に昇進し, 勤方は従来通りとされた。前記の「嘉永四年分限帳」に伊能英治郎とあるのは, その理由は明らかではない。左膳は安政 3 年 6 月 22 日, 若年寄役となり, 翌 4 年正月に長左衛門を襲名している。三輪清助次男英次郎を養子としたのは,

同5年3月2日のことである。4月に宗城の参勤上府に随従し、その耳目として活動することになった。

長左衛門は宗紀によって育成され、宗城の側近として攘夷派・一橋派の諸藩に密使した。高野長英の来藩、菊池為三郎の潜伏にも、家老松根図書・桑折長愿（左衛門・播摩）とともに尽力している。弘化3年の宗城の上府にも随従し、浅草火の番出役を務め、翌4年帰国して扈從頭鎗奉行となった。嘉永2年5月持筒頭となり、翌3年3月参勤上府、4年宗紀付として目付門支配、奥年寄・元締兼帯を務め、5年夏に帰国した。同6年6月、ペリー来航を憂慮し、翌安政元年3月、宗城に従い参勤上府の途中、ひそかに小田原から旅装を商人風に改め、船で下田に行つて日米和親条約締結直後の情勢を探索した。吉田松陰が逮捕された3日前というから、3月25日のことであろうか。4月4日着府、米艦の状況は宗城に報告された。

この時以来、長左衛門は宗城の股肱の臣として、島津斉彬・徳川斉昭・松平慶永・山内豊信ら攘夷派・一橋派の諸大名と宗城との間の密使を務め、慶永らの信任も得た。安政3年宗城が上府すると帰国し、参政（若年寄）として藩財政・海防に務めた。同5年4月、宗城に従つて上府、一橋派の大名、有志間をさかに往来した。前記の井伊直弼書翰に見えた日下部伊三治くさかべいそうじ（父はもと薩摩藩士、脱藩して水戸藩領で客遇中伊三治が出生した。伊三治は水戸藩に仕え、のち安政2年薩摩藩江戸邸に斉彬によって復帰した。同5年將軍継嗣問題・条約勅許問題が起こると上京、水戸の鵜飼幸吉らと三条実萬に入説、8月、幸吉は勅諭を持って東海道を下り、伊三治はその写しを持って木曾路を経て江戸に入り、安政の大獄に連座し、江戸伝馬町の獄で病没した）、橋本左内あじま、安島帯刀（安政3年水戸藩側用人、同5年7月家老。一橋派として中江雪江、一橋家の平岡円四郎らと策動、鵜殿吉左衛門の帯刀宛密書が幕吏に押収され、井伊大老の除奸計画が露頭して大獄の端緒となった。安政6年8月27日切腹ちのね）、茅野伊予之助（水戸弘道館訓導、安政4年小姓頭取、同5年池内大学を介して一橋派として活動、6年4月安島とともに評定所に呼び出され、8月27日死罪）³³⁾ら

と関係が密であった。

宗城が慶永・豊信と合議して、尾張藩主徳川慶勝を説得しようとしたが面会を拒否されたことは先述した。長左衛門は安島を説いて尾張藩・竹腰^{たけのこし}正美（同藩付家老、美濃今尾藩主3万石）、田宮如雲（弥太郎、篤輝、号桂園。尾張藩城代、金鉄組の組織者で慶勝の側近）らと折衝した。安政5年5月26日付長左衛門宛帯刀書状によると、「昨夜尾張藩有志を以、田宮方を為承候処、田云く、此節御嫌疑も有之、御逢の義は御迷惑との思召にて、竹腰迄御沙汰に相成候間、今程^{りゅうど}龍土（○宇和島藩江戸屋敷、宗城のこと）に而も御承知に相成候半と申候よし」とあり、徳川慶勝は幕府の嫌疑を恐れて、一橋派の先頭に立とうとはしなかった。福井藩士中根雪江とも連絡があり、宗城でだめならば、慶永が慶勝を訪問することがよく、慶永が明日幕閣へ建白し、「左も無之候ては勢切迫に相見候間、機会を失ひ候程難計旨も申遣（○下略）」と意見を伝えている。つまり、慶永は慶勝を訪問し、宗城は書翰を呈するという策を述べているのである。しかし、安政の大獄の開始のなかで、長左衛門は11月21日に逮捕され、藩邸に幽閉されて謹慎した。長左衛門は逮捕直前に書翰類を焼却したが、伊三治への書翰が証拠とされ、翌6年10月27日に幕府から重追放処分に処せられた。

長左衛門の「請証文」における罪状は、慶喜擁立について「一已に取候ては猶更携間敷き儀と乍弁、伊三次と御模様柄治定の義承合候節に至り、今更事実の心底申聞、同人存意を摧き候ては、猶又種々議論相立、主家迄も悪様に存候逆、西城云々之噂見聞を尽し候処云々、いまだ頼之縄之切果と申御場合とも申間敷杯、不軽儀を認、書通および候段、右一時の心得違との申分は難取用（○下略）」とあるように、伊三治とは兼てより懇意で、宗城の慶喜擁立についての見解を聞かれたが、これは長左衛門一身の事としながらも、まだ慶喜擁立について可能性の余地ありと文通したことがあげられ、重追放処分となった。関東・東海道・木曾路・畿内等での徘徊を禁止されたのである。藩内抗争・対外派兵もなかった宇和島藩は一人の幕末維新时期における犠牲者も出さなかったが、長左衛門のみが大獄において処分の対象となった。

宗城の義父春山は、条約調印・将軍継嗣の両問題が起こると、従来の徳川斉昭流の攘夷論を捨て、親戚関係もあって井伊大老に接近して親密となり、南紀派に組したことによって、宗城の政治活動は大いに制約された。そのなかで、一橋派としての責任は長左衛門のみに帰せられることになった。

安政5年5月14日付宗城（宇和島様）宛直弼書翰では、「昨夕は御出、種々御示教に預り千万辱（○下略）」とあり、三条実萬から山内豊信宛書翰も直弼に見せている。6月20日付書翰では、「昨日は早朝より御枉駕被下、不相替御厚情の程千万辱奉存候」とあり、諸大名の惣出仕も「小子か意とは丸に違候間」と述べ、宗城は逆に直弼に操作されている。6月20日付では、宗城が老中堀田正睦の留任を要望しているのに対し、「佐印（○正睦）の義は御申込の次第も有之、先跡廻りニ可致と心配致候得共（○下略）」と言いながら罷免に至ったことを、春山にも伝えるよう述べている。直弼は春山（伊予入道）宛に、6月24日付では斉昭・慶篤、慶恕（慶勝）・慶永の水戸・尾張両家と越前家の不時登城について、条約調印について非難され、同人等が将軍家定に対顔することは阻止したこと、両卿（田安・一橋）の登城にも触れている。「調印の義は大不出来と申もの」と海防掛に責任を転化し、京都へは老中間部詮勝（^{まなべあきかつ}鯖江藩主、安政の大獄を推進）を京都に派遣すると伝え、養君の発表は6月25日と決定されたこと、これによって水戸・尾張両家および越前家の反対を押し切ることを伝えている。このことは宗城にも伝えるよう言っている。「老公尾州越前など目指候所は、皆々小子一人、昨日の所にてはなんでも小子を取て落し候趣は頭はれ居候、上之御為と相成候事なれば、身は捨候ても不苦候得共、右等の人々の為におとされ候ては心外の至り、只今乍憚小子退き候ては、如何相成可申哉、其辺も兼々貴君遠江殿には厚く御憐察被下候義、是全く上の御為故の事に付（○下略）」、幕府専断の貫徹について理解を求めている。宇和島藩は条約調印・将軍継嗣問題の経過のなかで、従来の政治姿勢を大きく転向させざるをえないことになる。

安政6年11月12日、第9代藩主宗徳は、吉見家の家督307石を養子英次郎（永成）に相続させ、伊能と改姓させた。長左衛門は12月25日に帰国して「村

落」に居住し、伊能下野と称した。この改姓について、『北宇和郡誌』は伊能家文書の宗城直書を掲げている。「伊能 右姓之趣意者伊達家忠能之臣、此字面を相用候也」とある。

養子英次郎の家督相続は、「父長左衛門、従公儀重御咎有之、家名断絶之处、代々勤功有之、於長左衛門も格別致精勤候ニ付、以思召名跡被相立」とあり、宗城・宗徳は吉見家代々と長左衛門の功績を認めて、英次郎に旧知 307 石と屋敷を与えて児小姓勤めを命じたものであり、改姓は 11 月 15 日に命ぜられている。長左衛門は幕府へは所在不明と届けられ、伊能下野として参政に任用されていた。

『由緒書』によると、万延元年 11 月 7 日、英次郎は「親松蔭、以思召若年寄隠居並之御取扱被仰出、世上徘徊等も不及遠慮旨被仰出事」と記し、翌 12 月 5 日、「親松蔭義、下野と相名乗候段」、藩に届け出ている。文久元年（1861）6 月 27 日、下野は隠居料 7 人分を与えられている。翌 2 年 10 月 17 日、下野は若年寄御雇勤を命ぜられ、勤役中仕成米を与えられることになった。11 月、幕府は重追放処分を免じ、「行衛不分」とされていたため、「此以後行衛相分次第、右御免の段可申聞」と、江戸留守居役拓植万作に通達された。

12 月 27 日、幕府のこの通達に基づいて、「旧姓相復候様」と命じ、旧名・吉見長左衛門に復し、家督 307 石を再与し、正式に若年寄役として増高も与え、英次郎は再び嫡子となった。文久 2 年 10 月 27 日、長左衛門はまた伊能下野と改名している。

文久年間、公武合体運動の展開のなかで、伊達宗城の政治活動も復権し、宗城は文久 2 年 12 月に上洛するが、下野も同行して旧有志との交流を復活させ、翌文久 3 年（1863）4 月に帰国している。元治元年（1864）正月 17 日、下野は「当御時体ニ付」として、地方勤三ヶ年間 50 石を藩に返納している。この間、文久 2 年 5 月、時勢急務用掛となり、公武合体派と尊攘派の対抗、第一次幕長戦争への動きのなかで、その対応に当たることになった。元治元年 10 月、幕長戦争の態勢を幕府が整えると、宇和島藩は下野を藩主宗徳の参謀として出陣を

準備させ、同時に徳山藩主毛利元蕃^{もとみつ}の許に藩主菩提寺金剛山大隆寺の隠居僧晦巖らを派遣し、禁門の変の「悔悟陳謝」を勧告させた³⁴⁾。この時、宇和島藩は幕府から四国追手の一の先という先陣を命ぜられていた。中老清水飛弾ら数十人は徳山藩領に潜伏し、宗徳が渡航すれば徳山藩は開城・帰順する手筈になっていたが、征長総督徳川慶勝の解兵の命により沙汰止みになったという。

慶応2年(1866)6月、第二次幕長戦争に際し、宇和島藩は伊方浦まで出兵したが、英国公使パークスの宇和島来航を名目として、下野は藩兵を宇和島に帰した。翌3年3月17日、宗城4女理(安政5年2月5日生まれ、9歳)が英次郎の妻として婚約が成立しているが、「伊達系譜」には結婚の事実は記されていない。理は病身であったという。長左衛門は、明治元年(1868)正月12日に着座に昇進した。しかし、同年12月、宇和島藩は新政府から箱館出兵を命ぜられたにもかかわらず、派兵しなかった責任を問われ、家老松根図書・桜田出雲(数馬)が罰せられたとき、下野は京都に行って事後処理に当たった。同2年4月帰国、5月執政となり、同3年7月退隠し、同8年4月30日に病死した。

松根家の祖は、出羽国山形城主最上義光の弟の子光広である。
松根図書

光広はいわゆる最上騒動に連坐して、九州柳川藩主立花宗茂に預けられた。最上家一門であり、同時に義光の妹義姫が伊達輝宗の妻となり、政宗を生んだ³⁵⁾。光広と政宗はいとこの関係にある。光広の孫松根図書守宣は、この縁戚関係を頼って、仙台藩主伊達忠宗の指示により、正保4年(1647)、宇和島藩祖伊達秀宗の次男宗時に合力米百俵で召し出され、慶安5年(1652)に知行300石を拝領、御一門並家老の処遇を受け、やがて500石になった。「嘉永4年亥晩夏改 分限帳」には、高700石、内86石御増高となっている。

本稿で取り上げる図書は文政3年(1820)12月7日出生、幼名豊次郎、のち内蔵・図書と称し、諱は初め義守、のち紀茂、三楽と号した。父愚了は家老職を務め、嘉永3年(1850)9月27日に隠居、子の内蔵が家督を相続し、同6年2月16日に愚了は死去している。

図書紀茂は、天保2年(1831)藩主宗紀に御目見、同5年御扈從を務め、同

14年御扈從頭に任じ、宗紀の側近であった。宗城の代となり、弘化4年(1847)6月17日、若年寄役となった。同年11月16日、来年(嘉永元年)早春、宗城が御庄組海岸視察のさいの御供頭取を命ぜられている。海岸防禦と砲台建設のためである。嘉永2年(1849)閏4月27日、内蔵は小姓頭役加談の兼職を解かれている。同4年9月22日、家督相続、614石を与えられている。安政元年(1854)正月に着座に昇進、翌2年3月5日、徳川斉昭から「白鞘御刀并白銀」の下賜の内命を得、同月27日に老職加判となり、若年寄中との加談を命ぜられ、5月2日、学校(藩学明倫館)頭取に就任し、同3年2月17日、内用(藩財政)についての若年寄加談を解かれ、同4年5月27日、旗本頭を命ぜられている。文久3年(1863)5月22日、学校頭取を免ぜられ、「急務専可被取計」という任務を与えられている。宗城の公武合体派としての政治活動に直接的に関与することになった。元治元年(1864)6月12日、旗本頭を解任され、さらに職務に専心することになった。慶応2年(1866)9月、嫡子内蔵(城臣)が宗城の3女敏と結婚することになった。翌3年7月20日、宗城から直書をもって上京を命ぜられている。明治元年8月7日、新政府は宇和島藩兵500人の箱館派兵を命じられたが、ついに出兵せず、翌2年3月12日、藩主宗徳は謹慎、宗城は5月15日に議定・外国官知事を免職、図書は4月6日蟄居を命ぜられてその政治生命は終わり、明治27年3月4日、75歳で死去した。

図書は吉見長左衛門とともに、伊達宗城の信任がもっとも厚かった人物である。宇和島藩儒上甲振洋の嘉永5年2月28日付の「呈松参政書」のなかで、図書は「方今吾藩唯台下、有卓立之才、博識之学、礼(○振洋、礼三)所謂明敏果決、而格知涉獵者台下殆其人矣」と評価され、宗城の信任が厚く、図書もまたよく宗城を輔翼していると述べている。図書は宗城と同じく後期水戸学の信奉者であり、そのため斉昭の信任も得ていた。

「三楽松根図書事績考」によると、図書の家老としての職務は会計・市郷(領内支配)にあったとし、「一藩ノ治績、懸テ一身ニ在リト云フベシ」と重責を負っていたことを強調している。藩主伊達宗城の政治活動にはその使者として諸国

に派遣され、その活動の基盤となる経済、殖産興業に努めた。海産物・木蠟・茶・金融・藩札の発行等である。大坂藩邸の蔵元を加嶋屋作兵衛から井上市兵衛に交代させ、藩内では野村井手の普請、岩松川の付け替え等の土木工事を行った。八幡浜浦の商人高橋長平・菊池某を長崎に伴い、外国貿易に関係させた。これらは、藩の慶応の改革を指し、慶応2～3年の事と考えればよい。「維新ノ際ニハ富藩の名」があったと記されている。

「国事ニ関シテハ、内ニ在テ、宗城公ノ唯一ノ帷幄タリ、宗城公事アレバ必図書ノ意見ヲ徴シ、公ノ劃策、一トシテ図書ニ譚リ給ハザルモノナシ、外ニ出テ、ハ、公ヲ代表シ、又時ニ自己ノ意見ヲ徴サレテ、直接ニ当路ニ進スルコトアリ」と述べられている。徳川斉昭の家臣菊池為三郎、河野長英の宇和島潜居、村田蔵六の雇傭、薩摩の中井弘（変名田中幸輔）の使用も図書が関係している。

「図書は国事に関して常に黒幕に在りて画策者たり、宗城公とハ殆ど二身同体也」と評価されている。安政元年、造艦・軍事情視察のため、鹿児島・福岡両藩に派遣された。安政3年の参勤上府の時、井伊大老は伊達春山と親交を結ぶようになっていたが、春山に「貴藩ニ松根図書ナル者アルベシ、(朱、彼レ)当分江戸ニ御出シニナラスガヨシト」と述べたという。以来、図書は在国し、安政の大獄に連座することを免れた。

第一次幕長戦争の際、征長総督徳川慶勝が下向すると、大坂城における軍議に列座し、七卿・三家老の処分、徳山藩等萩藩の枝藩の帰順、萩藩主毛利敬親・元徳父子の罪名予定、長州藩抗命の時は即時攻撃（四方＝四境攻め）の4件を建策したという。將軍継嗣問題、条約勅許問題以来、攘夷論を捨て翼幕論（公武公体論）に急傾斜し、尊攘派から因循固陋と批判され始めた宗城の意をよく体した意見である。この頃から薩摩の西郷隆盛・小松帯刀らとの接触が多くなったという。さらに征長総督が広島に進むと、いったん帰国したのち、元治元年11月、広島に派遣され、長州処分問題について強硬論を主張した³⁶⁾以後、宇和島藩は長州藩尊攘派に対しては、幕府・徳川家保全の立場で対抗する。

図書は旅日記をよく書いたが、現在、元治元年の広島へ使者、慶応2年の長

崎日記、翌3年の京都日記、明治3年の仙台行日記が残っていて、『松根図書関係文書』に所収されている。薩摩藩士五代才助書翰等と合わせて後述したい。

須藤段右衛門 段右衛門は生没年不詳であるが、『家中由緒書』によると³⁷⁾

その父段右衛門は目付・軍使兼帯を務めている家柄である。

文化14年(1817)6月30日、父が死去し、段右衛門(幼名司馬)が家督122石8斗を相続し、家格は虎之間となっている。「文政元年改 分限帳上」でも司馬の禄高は同様であり、「嘉永四亥晩夏改 分限帳」では須藤段右衛門は禄高150石(内27石2斗増高、外に雑用料21俵6升6合)となっている。文政6年(1823)6月22日、児小姓となり、同8年閏6月7日、前髪を取るよう命ぜられ、同12年9月27日に御櫛番見習となっている。天保元年(1830)7月、宗紀の参勤の供をし、翌年2月帰国の供をし、7月に御櫛番となり、11月に宗城付きとなった(4年11月御免)。

以後の役職を見ると、天保5年5月、上府して座敷番役、同8年7月、下向して御膳番役となった。同14年7月、上府して近習・目付見習を命ぜられ、宗城の襲封後、弘化2年6月、目付本役軍使兼帯を命ぜられ、父の役職を継承している。嘉永6年6月、ペリー来航に伴い、急扨出府を命ぜられ、7月に着府、同月江戸を出立し9月に帰藩している。江戸における情報収集のためであろうし、このころから宗城の信任を得たと見てよい。同年11月進席、12月に九州へ派遣されることになった。翌7年正月3日、鹿児島・長崎・福岡へ行き、2月26日に帰国し、その後も2回長崎へ行き、10月29日に帰着している。鹿児島藩、長崎における造艦事情およびプチャーチン等の来航に伴う情報収集であろう。安政2年2月、郡奉行役目付兼帯、同5年12月、小姓頭順列奥年寄役となり、翌6年2月上府、万延元年4月江戸詰越、文久元年4月に帰国して小姓頭役になるという経歴によると、宗城は吉見・松根につぐ人材として育成し、職務を遂行させていると考えられる。

文久元年6月、目付役軍事兼帯、11月用人格、同3年正月上京を命ぜられ、18日に着京し、4月13日宗城の供をして帰国した。宗城の最初の上京に同行し

たのである。5月、小姓頭役持筒頭、元治元年6月持筒頭御免、翌7月、第一次幕長戦争の際、藩主宗徳の出陣の供を命ぜられた。慶応元年閏5月、若年寄に抜擢され、同3年4月10日、宗城上京の供をし、8月23日に帰着した。11月に上京、この時、宗城は長州処分、兵庫開港問題を周旋していたが、段右衛門（左膳）は藩士西園寺雪江（公成）、林玖十郎（得能亜斯登）・上甲貞一らと朝幕・諸藩間を奔走し、同4年6月立ち帰り帰国、7月に上京し10月晦日に帰国した。維新後は、明治2年8月大参事、同3年3月東京へ出、6月に帰国、11月に藩制改革により役免となっている。晩年は且と称していた。

林玖十郎（得能亜斯登）

天保8年、林三十郎の長子として生まれる。幼名彦次郎、父は弘化2年2月、三机浦番所勤三ヶ年詰方を命ぜられ、彦次郎も三机浦に同行した。嘉永2年7月、文武修行のため宇和島城下に逗留し、翌年正月に基吉郎と改名した（のち玖十郎と改名）。諱は通頭である。父は同7年閏7月、文武世話方を解任され、安政2年12月12日に隠居し、基吉郎が家督80石を継ぎ、虎之間に属した。同4年正月27日、剣術他所修行を許され、修行扶持二人分を与えられた³⁸⁾ 玖十郎は剣道を藩の田宮流師範鈴木和太夫に学び、安政3年正月から久留米藩津田一左衛門に一伝流を学び、翌年にも行って真伝を得、10月14日に帰藩している。これは藩主宗城の指示によると考えられる。

以後、玖十郎は宗城の側近となり、安政5年3月の参勤の供をし、10月宗城の隠居後、12月22日に小姓勤を命ぜられている。同6年3月23日、宗城の帰国に従い、4月19日に帰国している。以後宗城付きで別御殿に出仕した。文久元年10月、藩主宗徳の来春参勤の供を命ぜられて宗城付きを解任された。翌2年3月参勤の供をし、10月5日宗徳の供をして11月18日に帰国している。11月23日には宗城上京の供を命ぜられ、12月2日に出発した。同3年4月13日、宗城に随従して帰国、7月7日、虎之間学校目付を命ぜられ、役料9俵、小姓は従来通り務めた。同月22日、宗城の滞京中、「御守衛向き精励」によって反物を拝領した。同年8月、前月の藩英戦争の見舞いと「秘密御用」を兼ねて御

側使者として派遣され、9月18日に帰着している。元治元年5月、大洲藩へ御側使者を勤め、7月には禁門の変に関連する中国筋防長（萩藩領）内等へ数回秘密旅行して情報を収集している。慶応元年正月、前年秋以来の第一次幕長戦争に伴う数回の機密旅行の功により紋服を下賜された。同年3月、長州処分をめぐり萩藩主毛利敬親父子を召喚する幕命に関し、家老桑折駿河に従って播州龍野藩（藩主脇坂^{やすあや}安斐。大洲藩主加藤泰秋と伊達宗徳に毛利父子の連行が命ぜられた）と大坂の幕府大目付に対し、宗城・宗徳からの上申について至急旅行を命ぜられ、3月21日出発、さらに一人で上京し、用件を済ませて5月13日に帰国、5月17日御膳番順列、作事奉行になっている。翌2年6月12日元締役に昇進、同3年4月4日、宗城の供をして出発し、薩摩藩蒸気船三邦丸の回航を得て、御船用掛を命ぜられた。8月2日、京都留守居役となるが、同月17日宗城の帰国に同行し、広島藩の蒸気船を借用して、8月20日に帰国した。10月2日再度上京、水野八左衛門と交代して京都留守居役を務めた。松根図書とともに動いたと考えられる。

新政府の成立に伴い、慶応4年正月、下参与・徴士・海陸軍務掛を命ぜられて、戊辰戦争の戦略の評議に参画、大総督有栖川宮熾仁親王下参謀を命ぜられて出陣した（宇和島藩兵が戊辰戦争に参加したのではない）。4月討幕軍は江戸城入城、玖十郎も入城した。しかし、「至急の御用あり」、いったん帰京して、三条実美に随行して江戸城に帰った。5月、東征大総督府参謀柳原前光（堂上公家、宗城の2女初の夫となる）の下で参謀軍監兼務として甲州に出張、近藤勇ら甲陽鎮武隊を鎮定、11月に甲斐府を置き、12月末に帰京した。同月27日、「永々出陣功労御賞」として糸錦直垂地を下賜され、同時に下参謀を解任され、明治2年2月に帰藩した。

明治2年3月、藩主宗徳の上京の先乗りとして上京し、さらに東京の八丁堀藩邸に行った。4月、姓名を得能恭之助（のち亜斯登）と改め、6月5日に前年参謀として軍務精励の功労により金千両を下賜され、7月3日箱館府判事、8月2日北海道開拓使の設置に伴い、開拓権判官に任ぜられ、石狩表出張外務

御用兼務、箱館出張を命ぜられ、9月23日に東京から乗船して箱館に行った。明治3年11月、開拓府東京詰となるが、脚気を病み免官を請い、12月開拓権判官を解任され、同4年正月に帰郷した。以後、明治20年まで、神山県十等出仕、愛媛県会議員等を歴任した。

ケ) 宇和島藩の尊攘論者

宇和島藩の尊攘論は、伊達宗城が水戸藩の後期水戸学の影響を受けていたことで分かるように、宇和島藩士の尊攘論も万延元年までの段階では、宗城の思想を忠実に輔翼するものであった。

安政5年(1858)11月、水戸藩士住谷寅之助らが雄藩連合および大老井伊直弼襲撃の勧誘に来藩したことは既述した。その時、水戸藩側が宇和島藩内の有志と目した人物について、その経歴を検討してみよう³⁹⁾

まず、最初に挙げられている家老松根図書紀茂・江戸詰参政(若年寄)吉見左膳永憲については、前節で考察した。「住谷信順回国紀行」が、宇和島藩士中「斎藤一番」とする代官儒者斎藤丈蔵は、「嘉永四辛亥晩夏改 分限帳」によると⁴⁰⁾ 3人分9俵、外に9俵御役料とあり、この役料は丈蔵の多田組代官としての代官給である。宇和島藩中士(御徒間)の出身で、字は士明・子明、号を仲遠・扇岳と称した(文政6年～明治9年)⁴¹⁾ 藩学明倫館で都築燧洋(織衛)らに学び、さらに藤沢南岳・森田節斎に師事している。天保13年正月27日には上甲貞一・萩森栄之助らとともに、「文学出精上達」で賞与されている⁴²⁾ 兵頭賢一は宇和島藩出身の漂泊の儒者奥山鳳鳴(不破弘平)が、藤田東湖の「丁酉日録」天保8年7月16日条に、「奥山弘平来る慷慨の士なり、廿五日又来り訪れべしといふ」という記事を掲げ、また、佐久間象山が小松藩賓師近藤篤山をその徳行は天下第一とし、書蹟を乞うた書翰に「先生の御徳誼をば奥山生より伝承仕候」と述べている⁴³⁾ 象山と東湖と交流があり、高島流砲術と後期水戸学がこれらの人物を繋いでいるようである。

天保9年8月、第7代藩主宗紀、世子宗城が斉昭を小石川邸に訪問して政談

に及んだ。東湖は「見聞漫筆」のなかで、宗紀が江戸城でたびたび斉昭に謁見、議論し、同年8月朔日、斉昭邸に参上して高話を聞きたいと願い、「某が願ふ所は御饗応に非ず。唯ゆるゆる経済等の御高話を伺ひ度にて候」と、弁当持参での参上を求め、8月22日に訪問した。この時、側用人戸田銀次郎(忠敏)ら4人も列坐し、人物評に及んで「たゞ国元の臣に松根図書と申す者、よく某が心を存じ候者故、某悉く委任仕候」と述べたという⁴⁴⁾。この図書は図書紀茂の父愚了のことである。さらに宗紀は立原杏所・青山延于の案内で後楽園を見学し、さらに執政中村叔穆・東湖らと酒を飲み、酩酊して延于と大議論したという。

斉昭との親交、後期水戸学の宇和島藩流入は、この頃からと考えてよいであろう。話を丈蔵に返すと、丈蔵は嘉永末年から安政年間にかけて、水戸藩士桜真金(任蔵)・豊田香窓(小太郎)らの弘道館関係者と交流し、若狭國小浜藩士梅田雲浜(源次郎)とは深い関係があった。梅田は安政元年、丈蔵に「攘夷論」一篇を呈している。

丈蔵の代官在任中、嘉永元年～2年、卯之町(松葉町)在住のシーボルトの門弟の医師二宮敬作、亡命中の水戸藩士菊池為三郎(多田慎之助)、一時高野長英(伊東瑞溪)らが居り、丈蔵とその実弟大野昌三郎らとの間には密接な関係があり、丈蔵はそれらの人物の庇護者であり、同時に水戸学や高島流砲術に接していた。やがて、丈蔵は藩儒上甲貞一らとともに京都に出、京都留守居役の下で各地・各藩の情報収集に当たり、文久年間から明治初年まで在京したようである。伊達宗城が攘夷論から離れると、丈蔵らも同様に転向するのであり、以後は水戸藩・萩藩の尊攘論者に同調することはなかった。これは他の人物についても同様である。

大野昌三郎は高野長英の高弟、長崎のオランダ通詞森山栄之助(多吉郎)に蘭学を学び、さらに江戸へ出て中浜次郎から英学を修得し、帰国して数種の軍事書等の翻訳に従事した。昌三郎は菊池為三郎を通じ、水戸藩内では兵学者として知られていた。しかし、兄の丈蔵同様、水戸・萩藩の尊攘論者とは一線を画している。文久2年(1862)2月、伊達宗城の最初の上京の時、昌三郎は宗

城の身辺警固を目的として脱藩上京している。宗城の思想的転換によって、藩内の攘夷論者は糸の切れた風のような存在に化してしまった⁴⁵⁾

越智勝太郎は、「嘉永四辛亥晩夏改 分限帳」によると、4人分10俵、外に役科10俵、「又多田組兼帯に付被下、村夫貳人、右同断」とある⁴⁶⁾。天保13年3月22日、上甲貞一とともに素読指南方となり、文久3年8月2日、儒者になっている⁴⁷⁾。『家中由緒書』弘化4年「由緒書」によると、嘉永2年10月27日、蔵目付となって明倫館素読方指南は御免となり、翌3年11月22日、川原渕組代官役、同4年9月12日、山田組代官役、安政4年6月14日、多田組代官役兼帯となっている⁴⁸⁾。安政大地震のため代官所は倒壊し、旧卯之町庄屋鳥井半兵衛方が宇和両組を統合した代官所となったのである。文久3年8月2日、虎之間儒者を命ぜられ、切米20俵に増額され、金子春太郎、上甲貞一とともに明倫館御預けの身分となり、仕成米9俵を与えられた。慶応2年2月7日、明倫館御預け御免となり、9月17日、津島組代官となり、翌3年3月22日、病身のため就任している。勝太郎も丈蔵の思想的影響を受けていたのであろうが、尊攘論者としての行動の痕跡は認められない。ただ、幕末期の藩学明倫館には水戸学の流入があったとはいえる。住谷寅之助は以上3人に宇和島で会うことはできなかった。

住谷は宇和島で、高間権八、金子孝太郎・川上左治馬の3人に会ったという。権八は嘉永4年、禄高307石の上士である。父は高間八太夫で目付軍使兼帯を務めた。権八は幼名雄太郎、嘉永3年正月から権八と改名、父死去のため、同5年2月18日家督を相続し、小姓を務めた。同6年6月には御座敷番、さらに威遠流生兵^(ママ)(未訓練の兵卒)教授世話方となっている。万延元年閏3月17日、江戸下屋敷御広式番頭、文久元年8月13日、江戸で御膳番順列、11月20日御膳番役、同3年4月16日小納戸役、9月12日鉄砲頭、慶応2年11月7日小姓頭役、御徒御厩野奉行兼帯として持筒組を預けられている。権八の場合、威遠流砲術の関係者であり、その辺から水戸藩との関係があった。安政2年正月18日、権八は水野深右衛門とともに、砲術修行のため水戸に赴いていたが召喚さ

れている。その直後、27日、藤田東湖（水戸藩用人）が江戸藩邸で宗城に謁見しており、この2人は水戸藩内によく知られ、その思想的影響を受けた時期があったと考えてよい。水野は家禄184石2斗、水野平右衛門の子で、幼名虎之助、嘉永3年10月12日、父死去により家督を相続、翌4年3月2日小姓勤、同5年正月より深右衛門と改名、威遠流世話方を命ぜられ、安政3年には他所修行に出、同6年6月22日御座敷番、27日には威遠流生兵教授世話方を命ぜられている。文久元年正月11日、江戸で御膳番役、翌2年11月19日小銃製造引受、同3年4月17日刀番役、24日小銃製造引受御免、慶応元年8月17日近習役となったが、翌2年7月16日に病死している。⁴⁹⁾

金子孝太郎は禄高4人分20俵、金子篁陵（春太郎）の子、諱は通孝、漁洲・夢昼と号した。父は朱子学者であり、藩学明倫館教授として著名である。孝太郎は、天保6年2月、江戸留守詰となった父とともに江戸に出、同11年7月22日、明倫館に入塾し、翌12年2月、父の江戸留守詰越とともに江戸へ出た。この時に昌平校で学んだと考えられる。弘化2年6月17日、明倫館素読指南方となった。安政2年に儒者となり、文久3年5月12日、明倫館御預けを解任されている。以後、幕末に孝太郎の学術に関する記録はすくないが、昌平校で水戸学を学んで帰り、藩内でこれを鼓吹したという。「藍山公記」には他藩への使者または情報収集としての活動が見られる。⁵⁰⁾

川上左治馬は『嘉永四年 分限帳』、『家中由緒』下にもその名は見えない。住谷寅之助の錯誤ではなかろうか。住谷は菊池為三郎らから聞いていた人物像とは異なると評価し、宇和島藩の尊攘論者を、「何モ人物ナレトモ、菊池ノ時ト違ヒ、少々嫌疑アリ、規模狭小ナリ、不可談トソ」と述べている。宗紀・宗城の思想的転向はその家臣にまで及んだことが明らかである。水戸藩、さらには萩藩等の尊攘論者から、宇和島藩は翼幕（親幕府）の因循・保守の藩として認識されはじめる。

さて、文久年間からの萩藩等の尊攘派の活発な運動の展開のなかで、宇和島藩では党派的結合を持った尊攘思想は成長しなかったといってよい。しかし、

一部の藩士や庄屋役のなかに尊攘思想を有する者が出ている。それについては付記しておきたい。

まず、藩儒上甲振洋（文化14年～明治11年）である⁵¹⁾ 振洋の父順治は朱子学者で拙園と号し、野村組代官・御荘組代官を務めた。その長男貞一も藩学明倫館出仕の朱子学者で芳園と号し、虎之間列の上士の格式を与えられ、7代宗紀・8代宗城・9代宗徳の三代の藩主に仕え、矢野組・御荘組代官、さらに宗城の側近として文久年間以降探索方を務め、明治初年には藩の大参事となった。

振洋は順治の次男、通称は礼三であった。奥山鳳鳴（不破弘平）を尊敬し、小松藩賓師近藤篤山に学び、天保11年（1840）昌平校に学んだ。安積良斎・古賀侗庵を師としたが、振洋は篤山の朱子学を以って正統と考え、終生不変であった。弘化2年（1845）藩学明倫館に出仕した。しかし、同館都講の金子篁陵と見解が対立、嘉永5年（1852）に辞職し、安政元年（1854）には八幡浜で学塾余学楼を開いた。

振洋はアヘン戦争のころから外圧に対して厳しい認識を示し、ペリー来航については「国諸藩皆戒厳」の体制を考え、桜田門外の変では水戸浪士の壮挙を、薩英戦争では薩摩藩砲台の奮戦を賛えている。日米修好通商条約の締結にも反対で、文久年間、萩藩尊攘派を思想的に支持し、第二次薩長戦争における長州藩の士民を挙げての勝利に感動している。

八幡浜時代の振洋は草莽の士として攘夷を主張した。しかし、その思想は朱子学の尊王攘夷思想に発するもので、実践性を主張するものではなかった。宇和島藩の洋学摂取、殖産興業政策を批判するとともに、徹底した愚民観を持っていた。したがって、門弟は存在しても党派の形成と実践の観点はほとんどなかった。門弟には藩士末広重恭（鉄腸）・鈴村讓・本城政恒、吉田藩家老飯淵貞幹、八幡浜の浅井記博、大浦庄屋清家信篤ら多数があった。振洋は京都の陽明学者春日潜庵に会い、その思想的影響を受けて朱子学と陽明学の思想は同根と考え、初めて実践を重視したが、それは明治新政府の開化政策に反対するものとなる。佐賀の乱から西南戦争のなかで画策するが、ようやく長男震吉・鈴村・

本城らが藩内で策動したのに止まり、他藩の尊攘論者とはその行動性を異にするものであった。

土佐藩尊攘派の思想的影響を受け、脱藩して尊攘運動に参加しようとした人物に市村敏麿がある。⁵²⁾ 宇和島藩山奥組古市村庄屋芝氏の出身で、天誅組の変に参加しようとして果たさず、長州藩の諸隊忠勇隊に加わったが、思想の実践はそこまでで、帰藩して、宗城の探索方として松山藩などの情報を収集している。不発に終わった尊攘思想家である。

他には脱藩者に土居通夫・山崎惣六・五百騎一正・児島惟謙らがある。⁵³⁾ かれらは振洋・敏麿とは無関係といってよく、尊攘運動の本流との関係は稀薄といえよう。御荘組城辺村庄屋矢野安芸三郎を始め、二宮新吉・山中開道・岡村松軒・二宮篤四郎・林奎十郎・矢野勇太郎・山内玄通ら御庄組・保内組・山奥組有志の動向も同様に考えてよかろう。

注

- 1) 「藍山公記」巻111, 19丁
- 2) 同 26～29丁。7月6日付。『紀事』引用。『逸事史補』では直信を宗城の実弟としている。
- 3) 同 30～34丁
- 4) 同 43～44丁
- 5) 同 51丁, 直接関係はないが6月28日, 宗城は次の諸品の購入を幕府に求めている。

覚

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 一, 望遠鏡 一箱 | 一, 軍用背負繰出望遠鏡 一箱 |
| 一, シニュゲウエール 二挺 | 一, ケロンビス 一挺 |
| 一, 猟銃 一箱 | 一, 六閤短銃 二箱 |
| 一, カラペイン 一挺 | 一, 軽騎兵用馬具 一揃 |
| 一, ヒストール 一箱 | 一, セキスタント 一箱 |
| 一, フクタント 一箱 | 一, コロノメトル 一箱 |
| 一, アシミュツコンパス 一器 | |

- 6) 同 52丁

- 7) 斉彬はすでに7月16日に死去していた。橋本左内は斉彬の早期出府に反対していたという。
- 8) 「御書翰類」第5巻
- 9) 「公記」巻111, 54丁
- 10) 同 5月27日, 二宮宅四郎の指揮により蒸気船銅壺が完成している。
- 11) 同 巻112, 5丁～
- 12) 同 10丁～ 坪井芳洲の容体書あり。
- 13) 同 19丁～ 宗城は8月13日コレラ「流行病予防法」を書いている。
- 14) 同 29丁～
- 15) 同 34丁～
- 16) 同 41丁
- 17) 同 44丁
- 18) 同 巻113 33丁
- 19) 同 35丁
- 20) 近代史文庫宇和島研究会『家中由緒書』下4ページ
- 21) 「御書翰類」第5巻 51丁
- 22) 同 52丁
- 23) 同 第6巻 1丁
- 24) 「藍山公記」巻115 5丁
- 25) 同 11丁
- 26) 同 22丁
- 27) 河内八郎『住谷寅之助と土佐藩・宇和島藩』（『茨城県史研究』第38号）
- 28) 「公記」巻116 18～19丁
- 29) 「公記」の編者鈴木譲は、記録類にこの日鹿狩りの事実なく、桑折は前年死亡しているの
で、この件は宗城の記憶違いとするが、宗城の直話として記載している。
- 30) 「公記」巻116 37丁
- 31) 同 40丁
- 32) 吉見の項、『北宇和郡誌』の「人物小伝」ならびに近代史文庫宇和島研究会『伊達家史料・
家中由緒書』上・中・下巻参照。
- 33) 日下部・安島・茅根については、日本歴史学会編『明治維新人名辞典』による。
- 34) 三好昌文『龍華山史』67～73ページ参照。
- 35) 図書の項は、すべて『宇和島・吉田旧記』第七輯『松根図書関係文書』（三好他編）によ
る。(株)佐川印刷所刊。
- 36) 文久年間以降の宇和島藩の動向については後稿で考察するので、それに際して図書の日
記等も引用したい。

- 37) 段右衛門の項は『家中由緒書』下および『北宇和郡誌』の「人物小伝」による。その出生は文化10年正月26日、母は多都味久之允妹と考えられる。
- 38) 玖十郎も『家中由緒書』下および『北宇和郡誌』の「人物小伝」による。
- 39) 河内八郎『住谷寅之助と土佐藩・宇和島藩』（『茨城県史研究』第38号）に挙げられている人物について、史料的に解明できる人物を取り上げ、『家中由緒』下の記録によって考察する。
- 40) 『家中由緒書』下 419 ページ
- 41) 白田三雅『斎藤响先生とその一族』（『虎杖』第41巻 平成2年4月号）
- 42) 兵頭賢一『宇和島藩に於ける尊王思想の発達』南予文化協会、昭和15年11月。
- 43) 兵頭・前掲書 98 ページ～
- 44) 同 88～89 ページ
- 45) 三好昌文『忘れられた洋学者—伊予宇和島藩士大野昌三郎』参照。（『松山大学創立七十周年記念論文集』）
- 46) 『家中由緒書』下 418 ページ
- 47) 兵頭・前掲書 106～108 ページ
- 48) 『嘉永四辛亥晩夏改 分限帳』は、前記の伊能英次郎の記事、越智勝太郎の記事の例から見て、その作成年代は安政年間ではないかと考えられる。
- 49) 高間・水野については、『家中由緒書』下、「藍山公記」巻64 参照
- 50) 『家中由緒書』下、『北宇和郡誌』「人物小伝」、兵頭前掲書参照
- 51) 三好昌文『上甲振洋とその思想の帰結について』（『瀬戸内海地域史研究』第4輯）
- 52) 徳田三十四『市村敏麿翁の面影』参照。敏麿と無役地事件との関係については、三好昌文『明治維新期の階級闘争（II）—無役地事件について』（『愛媛資本主義社会史』第2巻）参照。
- 53) 兵頭賢一・前掲書 68 ページ～